

近代合理主義とドイツ第三帝国の医療犯罪 —批判的談話分析の視点から—

吉田 昌弘*

Modern Rationalism and The Medical Crime of Nazi Germany

Masahiro Yoshida

The Holocaust of the Third Reich has conventionally been considered to be a crime performed by the Nazis. However, the word *Nazi* has emphasized only their special political system and racism, and it has concealed problems and the common recognition that rooted in then German social context. Actually many members of the social elite participated in the crimes of Nazi Germany. Surely studies have been made on many of the Nazi felonies carried out by politicians, bureaucrats, and members of the military, but little is known about medical crimes. In this article, I concentrated on the Nazi doctors who committed crimes against their patients in the name of medical care and tried to examine the doctors' sense of value and their ideology by analyzing their discourses linguistically from various angles. The following results were obtained: first, they seemed to have had several principles: accomplishment, ambition, and career. Second, they thought highly of statistics, sorting, and efficiency. And finally, they regarded their patients (human being) as objective substance for their experiment. Judging from the above, these results led me to the conclusion that the doctors' sense of values and ideology were combined with modern rationalism, which caused doctors to take part in the plot.

1. はじめに

本研究はドイツ第三帝国の犯罪行為について言語学的手法に基づいて考察するものである。本研究意義の第一は、第三帝国の犯罪行為の中でも、医療犯罪¹⁾に焦点を当てること、そして第二は、この研究が「クリティカル・ディスコース・アナリシス」(“Critical Discourse Analysis” 以下「CDA」という言語学的手法によって考察されることにある。ナチス、戦争犯罪、医療といった社会的に重要なテーマを、当事者の談話²⁾を言語学的手法によって分析し、更に歴史学の研究者による学説を加味して、学際的に考察してゆくものである。

医療犯罪の先行研究としては、Mitscherlich, A. (1908-1982) と Mielke, F. (1922-1959) による “Medizin ohne Menschlichkeit”³⁾、カール・カウルによる『アウシュヴィッツの医師たち』⁴⁾が、ニュールンベルグ医療裁判の資料をもとに、強制収容所

で人体実験に関わった医師の談話を集めた文献として挙げられる。また、安楽死問題の研究では、その先駆けとなった Klee, E. (1942-) の “Euthanasie im NS-Staat”⁵⁾の他、日本では木畑和子が多くの研究実績を残している。本研究の目的は、歴史的に貴重な談話を CDA という言語学的手法で考察し、そこに隠されたイデオロギーを明るみに出すことによって、いかなる要因が彼らに医療犯罪を行わせたのかという問題の解明を目指すことである。

2. 研究方法

現在、CDA の代表的な研究者は何人が存在しているが、その方法論は必ずしも統一されたものではない。しかしながら、CDA を最大公約数的にまとめるとするならば、次のような高橋¹³⁾の定義が概ね妥当ではないだろうか。「CDA とは社会における権力関係を含む談話を批判的に分析する一連の談話

*東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2007年9月19日 受理

分析研究である。様々な方向性の研究が見られるが、一般的な談話分析が、言語現象の客観的な記述を目標とするのに対し、CDA はそれをイデオロギーや権力の問題と結びつけ、あくまで批判的な分析を行うところが際立っている」。本研究は、第三帝国の医師達のイデオロギーを中心に、医療犯罪の起こりえた社会状況を考察してゆくものであるから、CDA の手法を基軸として分析を行うこととした。

2.1 CDA の概要

Fairclough, N.¹⁾は、社会と言語との関係について次のように述べている。(1) 言語は社会の一部であり、(2) 言語は社会過程 (social process) であり、(3) 言語は社会によって条件付けられる過程 (socially conditioned process) である。このことは、言語を談話としてばかりではなく、社会的行為として捉える場合には、テキストのみではなく、テキストと社会過程と社会的条件との関係を分析しなければならないということであり、そのための CDA のプロセスとして、以下の三段階の分析過程を提案している²⁾。

第一段階 “description” : テキストの形式的特徴の分析。

第二段階 “interpretation” : テキスト生成・解釈の際、前提とされる常識・知識・価値観等の分析。

第三段階 “explanation” : テキストの作成・解釈過程と社会状況の関係、テキストの社会的影響の考察。

つまり、第一段階においては、談話者の語彙、文法、テキスト構造に注目し、第二段階では、それらの言語学的用法から、談話者の現実に対する認識や価値観を分析する。第三段階は第二段階で明らかになった認識、価値観を基に、それらに影響を与えた社会構造と、さらにテキストが社会構造に及ぼした影響を分析する。本研究は、医療犯罪に関係した医師達の談話——(半)公式的見解であり、発言の真意はともかく、その談話が受け入れられ、正当化できると彼らが考えていた社会的価値観の表明——を分析することによって、第三帝国期の医師のイデオロギーを解明することができると考える。

さらに Wodak, R. と Reisigl, M.¹⁴⁾が言うところの「三角測量原理」——「学際的に、多元的方法論的に、さまざまな背景知識と同様に、さまざまな体験的データによる歴史的談話分析」に基づく研究手法——も取り入れることとする。すなわち、ポイカー

ト (1950–1990)、木畑、科学史学者プロクターや社会学者のハッキング等の分析・見解を加えて考察を行い、より客観性の高い分析と複数の理由付けによる説得力の向上を目指すこととした。

2.2 分析対象テキスト

上述のように、本考察は批判的談話分析 (CDA) の手法によって、ドイツ第三帝国の医療犯罪に関わった医師の文章や証言を考察する文献研究である。対象とする文献は歴史的資料として信頼できる、以下三冊の文献を使用することとした。

一冊目は、1946 年 12 月から 1947 年 7 月までアメリカ主導で行われたニュールンベルグ医師裁判 (一般的なニュールンベルグ裁判とは別裁判) の記録を、Mitscherlich, A. と Mielke, F. が編集・解説した文献 “Medizin ohne Menschlichkeit”⁸⁾ である。本文献はナチスの強制収容所における、様々な人体実験の模様を、裁判記録を元に、詳細に記述したものである。Mitscherlich はハイデルベルグ大学精神分析学・身体医学教授、フランクフルト大学心理学教授を歴任し、60 年以降フロイト研究所所長も兼任したドイツ精神分析学の中心人物であった。一方、Mielke は医学博士であり、本文献のために膨大な量の資料を収集し、編集面でも Mitscherlich に協力した。

二冊目の文献は、「安楽死」問題を扱った、Klee, E. の “Euthanasie im NS-Staat”⁷⁾ である。「安楽死」問題研究の契機ともなった本文献の著者クレーは神学及び社会教育学を専攻した学者で、第三帝国の障害者問題、安楽死、ナチス医師などについて多くの論著、編著を刊行している。この文献でも、実に多くの裁判記録 (起訴状、判決文) が使用されており、「安楽死 (殺害)、ナチス医師の研究史において、Klee の本書は、これらの仕事のほとんどすべてにおいて引用・参照され、時にはそれを下敷きにして叙述されるほどの影響力を及ぼしてきた」と松下⁹⁾は述べている。

三冊目の文献は、Schwarberg, G. による “Der SS-Arzt und die Kinder vom Bullenhuser Damm”¹²⁾ である。この文献は、強制収容所において 20 人のユダヤ人の子供たちへの人体実験と、その後の証拠隠滅のための殺害を追跡した記録であり、医師や収容所看守の証言も多く記録されている。

3. ドイツ第三帝国医師の CDA

本研究の CDA では、5 名の医師の談話を取り上げることとする。各医師のテキストは、分析に際し必要最小限に断片化している。分析対象となる医師たちの社会的アイデンティティ、典拠文献、談話形態、及び、概要（考察に必要と思われる前提知識や社会状況）を一覧表として表 3-1(アルファベット順)にまとめた。

(表 3-1 談話分析対象医師)

医師名／肩書	出典文献	談話形態・概要
ブランド、 カール博士 国家衛生局長兼 ヒトラー主治医	Mitscherlich & Mielke, 1949, p. 269	裁判証言 (1947 年) 安楽死殺害対象者を リストアップする基準 の決定や、医師への殺 害権限の付与という任 務の実行。1947 年死刑 判決。
グラヴィッツ、 エルンスト博士 親衛隊医師	Mitscherlich & Mielke, 1949, p.105	手紙 (1944 年) ヒムラー長官宛 海水飲料水化実験へ の囚人貸与依頼。この 手紙で博士は、自分の 行う人体実験の被験者 についての要望を述べて いる。
ハインツェ、 ハンス博士 ブランデンブル グ精神病院長 41 年 12 月より 安楽死統括機関 の医療部門の責 任者	Klee, 1985, p.440	手紙 (1944 年) ニッチェ博士宛 各病院での、不統一な 基準による安楽死実行 に対し、中央の統制を 強化して、秩序ある体 制の再建を訴えている。
ハイスマイヤー、 クルト博士	Schwarberg, 1997, p.34, p.109	1944 年 6 月、ノイエ ガンメ強制収容所にお いて、肺結核ワクチン 研究の為に人体実験を 開始。成人の他、20 人 の子供にも人体実験を 実施 (のち処刑)。1966 年終身刑判決。
ハイデ、 ヴェルナー博士 安楽死統括機関 の医療部門責任 者兼鑑定人	Klee, 1985, p.295	当初の安楽死中央機 関の医療部長であり、 成人の鑑定人であった 博士は、子供の安楽死 への関与は否定した。

3.1 選別の基準：ハインツェ博士

Die Ding wären nur in richtige Bahnen zu lenken, wenn man während des illegalen Interims die

Reichsausschuß-Erfahrungen zum Vorbild nehmen würde und dann auf jeden Fall wieder eine zentrale Steuerung erreicht hätte. Diese Zentrale aber müßte die Machtbefugnisse haben, mit eisernem Besen zu kehren und jeden zu bestrafen, der auf eigene Faust zu handeln wagt. Wenn wir das nicht erreichen, hilft unser ganzes Bemühen um die Hebung des Ansehens der Psychiatrie einen Dreck.

(日本語訳：クレー, 1999, p.596)

こうした事態は不法な暫定措置が取られている間に帝国委員会の経験が模範とされ、再び中央の制御が精神病院の隅々に達した場合のみ、正しい道へと向けられるでしょう。中央はびしびし取り締まって、敢えて独力で行動しようとするものを誰でも罰するという権限をもたなければならないでしょう。もし私達にそれができないのなら、精神医学の威信を高めるといふ我々の努力は総て無に帰すことになります。

【description】

かつて中央機関によって統率されていた安楽死が、各精神病院の勝手な判断によって患者が選定・殺害されている現状に関して、ハインツェ博士が、安楽死医療責任者に宛てた抗議の手紙である。博士は、管理体制の不備 (による殺害) が威信の失墜を招くのではなく、選別の基準が守られていないことに不満を持っていると考えられる。なぜならば、患者の殺害行為自体は国家政策であり、各病院は国政にかなった行動をしているからである。

【interpretation】

医学における“die Hebung”(威信)とは、治療実績のことである。各病院の選別基準が異なるということは、治療実績の統計上の分母が科学的根拠を失うことである。さらに、各病院の選別の基準とは、患者の労働力の有無であって、治癒の可能性の有無ではなかった。クレー⁷⁾は鑑定基準の内容について「唯一の決定的な選択基準は患者が生産的労働能力を持つか否かの問題である。〔中略〕結局問題なのは、もはや遺伝衛生学ではなく、できるだけたくさんの役に立たない従食者を片づけることであった」と指摘している。そのため治癒可能な患者も殺害される可能性があり、治療実績を下げてしまう恐れがあるとハインツェ博士は考えたと推測しうる。

精神医療には、次のような史的背景がある。すなわち、啓蒙主義の発展と共に、精神障害者への扱い

も変化してきた。従来、精神障害者は、その危険性のため、鎖につながれていたが、多くの患者がそれから開放されたのである。しかし、精神障害者による犯罪も増加し、「精神医学は治るものと治らないもの（症状が悪化するもの）をはっきり区別する二分法をとるように求められた」⁹⁾。つまり、患者のより分け自体は、ドイツ独自のものでもなければ、ナチス期に特有のものでもない。しかし、第一次敗戦後の経済的不況と、それに伴う優生思想の浸透は、生きるに値しない命が存在するという共通認識を助長した。「治療しても無駄な者を抹殺すれば、その分治癒可能な者の治療に力を振り向けることができる」とし、医師達は迅速にこの振り分け作業を進めていった¹⁰⁾のである。医師には、「治る見込みのない患者」を分母から差し引き（殺害し）、治る見込みのある患者だけを、診断するという行為の合理性、この合理性の持つ魅力に取り付かれていたと考察できる。

3.2 数値比較：ハイスマイヤー博士

① Als Arzt wußte ich natürlich, daß ich dies nicht tun durfte.

② Hinzu kommt meine Überzeugung, mit diesen Versuchen nichts Schlechts gewollt und auch nichts Schlechtes getan zu haben, wenn das Konzentrationslager dabei ausgeklammert wird.

③ Außerdem erwarte ich, daß bei einer gerechten Beurteilung die schlechten Fälle den guten gegenübergestellt werden, und dann dürfte wohl der Beweis erbracht sein, mehr Kranken geholfen als nicht geholfen zu haben.

（日本語訳：シュバルベルク, 1991, p.120）

① 医者として私は当然、これがしてはならないことだとわかっていました。

②そして強制収容所のことを、括弧に入れますなら、あの実験で何もよこしまな考えは無かったし、何もよこしまなことはしなかった、という私の確信をここに付け加えておきます。

③その他に私が期待しますのは、公正な判断によって、悪いケースに良いケースも対置されること。そして助けなかった患者より、助けた患者の方が多いと証明されることであります。

【description】

① “Als Arzt”（医者として）を先頭に出した倒置構文であり、医師としての立場に最も力点をおいた表現をしている。また “natürlich”（当然）という言葉で、更に “daß ich dies nicht tun durfte”（これ[人体実験]が許されるべきではないこと）を知っていたことを強調している（括弧内は筆者による）。しかしながら、②において実験自体に “nicht Schlechtes”（よこしまな考え・意志）は無かったと主張している。即ち人体実験は社会・倫理的に許されないが、それは外的な制約にすぎず、人体実験自体に内在的な問題はないという主張に思われる。つまり、科学や医学の一部として人体実験は誤っておらず、ただ、社会的倫理に鑑みた場合にのみ、問題があるという立場の表明と考えられる。このような職業としての科学と社会的倫理の分離に、近代的合理主義と職業的価値観が示されている。

③は人体実験の事実自体が許されない場合の更なる弁明である。助けなかった患者より、助けた患者の方の数が多いという、功績の評価（＝公正な判断）を求めているが、ここでも人間を数値化して、評価をもとめる業績主義を読み取ることができる。

【interpretation】

1944年の時点では、連合国側やユダヤ人から、ナチスの戦後の戦争犯罪人処罰が公言されていた³⁾。それを知りながら、ハイスマイヤー医師が、敢えて人体実験を行ったのには、以下のことが考えられる。すなわち、実験は社会的倫理の規範に外れる行為であったが、あくまで後遺症や死亡は、結果論であって、実験の目的ではないという理論である。ゆえに、自分自身が（戦争）犯罪人として、責任を問われることは考えていなかったと推測できる。それは、② “mit diesen Versuchen nichts Schlechts gewollt und auch nichts Schlechtes getan zu haben”（よこしまな考え・行動は無かった）という証言にあらわれているが、ここに博士の、医学上の業績や科学の営為が人間の命に優先するという考えが伺える。

3.3 医師の専門性：ハイデ博士

① Ich habe das Ansinnen verneint...weil die Kindereuthanasie auch bei Kindern mit schwersten körperlichen Mißbildungen ohne erkennbare psychische Defekte angewendet wurde.

③ Hierzu ist erläuternd noch zu ergänzen, daß bei

Kindern vor Eintreten der Pubertät die Fälle reiner Geisteskrankheiten nachgewiesenermaßen in der Weltliteratur zu den extremsten Seltenheiten gehören.

④Aus dieser Darstellung ergibt sich ohne weiteres, daß die Kindereuthanasie für mich als Psychiater kein eigentliches Betätigungsfeld bot.

(日本語訳：クレイ, 1999, p.400)

①私はこの②無理な要求[子供の安楽死の鑑定をするようにという依頼]を拒否した…なぜなら子供の安楽死は重症の肉体的奇形の場合、それと認められる精神的欠陥がなくとも適用されたからだ。(括弧内は筆者による)

③思春期に達したばかりの子供の場合は文献上において立証されるごとく、純粋な精神病の症例というのは極めてまれである。

④これですぐわかるように子供の安楽死はそもそも精神科医である私の活動分野ではない。

【description】

①においては、重度の肉体的障害があれば、自分の専門である、精神障害が無くても安楽死の対象として鑑定されるという当時の社会的状況を、③では更に、思春期に達したばかりの子供には精神障害の例は、学術上、まれなケースであることと述べている。すなわち、仮に博士が子供の安楽死の鑑定を引き受けたとしても、自分の精神科医としての専門性を生かすケースが無いことを述べている。そして④において、子供の安楽死は精神科の分野ではなく、自分の専門外の仕事であると結論づけている。②“Ansinnen”という言葉は、不可能ないし理不尽な要求、提案という意味であり、子供の安楽死の鑑定を担当することが、博士にとっては、不可能ないし理不尽なことと認識していたと思われる。

【interpretation】

この談話から、ハイデ博士の医師としての専門領域への固執が考察される。博士は、上述の通り、成人の安楽死鑑定士であり、子供の安楽死実施自体も肯定していた。にもかかわらず、博士がこの依頼を受けなかったのは、自分の専門領域外であるからであって、子供への安楽死を善悪の立場で判断したからではないと思われる。しかも、鑑定自体は、各病院からの調査書をチェックするだけで、患者自体を直接、博士が診断することはなかった。学問的な判断基準は、さして綿密なものでもないにもかかわらず

ず、専門領域を盾に、依頼を断ったところに医学界内の縄張り意識が読み取れる。

3.4 人体資源化：グラヴィッツ博士

Zu dem Vorschlag von SS-Gruppenführer Nebe, Zigeuner zur Durchführung der Versuche zu benutzen, erlaube ich mir, den Einwand zu machen, daß ①die Zigeuner bei ihrer teilweise andersartigen rassischen Zusammensetzung möglicherweise Versuchsergebnisse bringen, die auf ②unsere Männer nicht ohne weiteres anzuwenden sind. Aus diesem Grunde wäre es wünschenswert, wenn für die Versuche solche Häftlinge zur Verfügung gestellt werden könnten. ③die rassisch der europäischen Bevölkerung vergleichbar sind. Ich bitte gehorsamst um Übermittlung der Genehmigung, damit die Versuche anlaufen können.

(日本語訳：ミチャーリッヒ & ミールケ, 2001, p.101)

ジブシーを実験の実施に利用すべしという SS グループ指導者ネーベの提案に対し、私は反対します。それは①ジブシーが部分的には別種の人種の結合からなるところから、②われわれドイツ人にはすぐさま適用できないような実験結果が出てくるかもしれないからです。この理由から③人種的にヨーロッパ人の住人と類似の囚人を実験に供することが望ましいでしょう。どうか実験が軌道に乗るよう、ご承認くださることを切望いたします。

【description】

この談話には①から③の三種類の「人種」が登場している。それぞれ修飾語で形容されているが、ここから、話者の各人種に対する階層化された価値観を見て取れる。

最上級の人種は②“unsere Männer”(われらの民族)である。“unser”(われわれ)という言葉をつけることでドイツ民族(アーリア人種)をingroupとして構成し、他の劣等人種outgroupと明確に区分している。ここでは“unser”(我々)というダイクシス(直示)が使われているが、その言及対象は、文脈依存性が高く、曖昧で、何処までが“unsere Männer”なのか、実際には限定が困難である。しかし、ダイクシスを使うことによって、この曖昧さが隠蔽される。つまり、ここでの“unsere Männer”は純血アーリア人種、ゲルマン民族を示していると思

われるのだが、このような人種や民族の境界線を示すことは困難であるにも関わらず、我々ドイツ民族、アーリア人種という表現を使うことにより、あたかもそのような実態が前提可能であるような効果が得られるのである。

次に③ “die rassisch der europäischen Bevölkerung vergleichbar” (人種的にヨーロッパ人の住人と類似の囚人) がランクされる。“vergleichbar” という単語は比較可能なという形容詞で、グラヴィッツ博士は人種的な違いが、実験結果に及ぼす影響を苦慮し、出来るだけアーリア人種、ゲルマン民族に近い人種を望んでいる。

最下位には① “Zigeuner bei ihrer teilweise andersartigen rassischen Zusammensetzung” (部分的には別種の人種の結合からなるジプシー) がランクされる。“Zusammensetzung” という言葉は「構成物質」という意味であり、人間性が排除された単語であるが、博士はロマ人 (=ジプシー) のことを、様々な種族の身体部品からなる不純な人種と認識していたと考えられる。

【interpretation】

この実験における被験者の「経過検査項目」には、「血液分析」「尿分析 (体内の水分変化)」⁹⁾があり、従って血液と内臓器という部品が、博士にとって大きな問題になっていた。博士の認識では、ドイツ人とロマ人の人体構造は、ドイツ人の血液とロマ人の血液、あるいはドイツ人の肝臓とロマ人の肝臓という個々の臓器を重要な構成要素としており、正しい被験者の正しい構造とは、すべての部品がゲルマン民族からなる被験者であった。たとえドイツ人の血が混じっていると看做しても、混血では適切な被験者とは言えず、科学者としての正確な実験は行えないという意識が博士にあったと考えられる。

以上のことから、被験者の生死に関わる実験においても、同胞ドイツ民族を実験道具にしたいという、グラヴィッツ博士の願望が推察できる。このことは、博士において、ナショナリズム的思想より、人間の物理的客体化と構成要素への分化を基本とした、医師の職業的価値観 (科学主義) が勝っていたことを示唆している。

3.5 「生き物」「存在物」：ブランド博士

Es war getragen von einem absolut menschlichen Empfinden, ich habe nie etwas anderes beabsichtigt und

nie etwas anderes geglaubt, als daß diesen armseligen ①Wesen das qualvolle Dasein ②abgekürzt wird' ...

“Ich bin aber überzeugt, daß diese Angehörigen heute diese Schmerzen überwunden haben und daß sie selbst das Empfinden haben, daß ihre toten Angehörigen von einem Leiden ③erlöst worden sind.”

(日本語訳：ミチャーリッヒ & ミールケ, 2001, p.266)

私がしたことは完全に人間的感情に準拠している。あの哀れな①生き物の苦痛に満ちた人生を②短縮すること以外は何も意図しなかったし考えもしなかった。〔中略〕しかし私は遺族が今日ではこの苦痛を克服し彼ら自身が自分達の死せる親族は実は苦しみから③救済されたのだと実感している事を確信している。

【description】

① “Das Wesen” という単語には確かに、人間という意味も含まれているが、ニュアンスは神の被造物としての人間の存在や本質、生き物という、非常に抽象度の高いものである。その後の “Wesen” を目的語にとる動詞② “abkurzen” (abgekürzt) は工程、期間などを短縮するという意味であり、殺害等のニュアンスを表す言葉ではない。また③ “erlöden” (erlöst) も “helfen” や “retten” のような一般的な、助けるという意味ではなく、神による救済と宗教的色彩が反映されている。

【interpretation】

この陳述からは彼の罪の意識は、見て取ることが出来ない。それどころか、人間を生き物、存在物、と表現して人間の持つ人格や権利を隠蔽すると同時に、殺害という言葉を使わず、短縮という表現を使って、自分の犯罪が殺人ではなく医療的作業であることを暗示している。また、宗教的色彩を持つ言語を多用していることは、医療が人の命を自由に操ることのできる、神の領域に属するものと認識されていたことを示唆している。ポイカート¹⁰⁾は「近代科学は、キリスト教会に取って代わって、科学的な意味問題への回答を引き受けることになった」と述べている。キリスト教を中心とした時代から近代科学の時代へと進化した社会、その社会の担い手としての科学者の自負心が、彼らの職業的価値観の礎ともなっていたのではないだろうか。

3.6 Explanation

以上の医師達の談話から、次のようなイデオロギーが存在していたと考えられる。すなわち、近代医学においては、実績を示す指標として統計化、数量化を行って、自らの業績を客観的に明示していかなければならないということである。「科学、医学のナチ化は同時に統計学への傾倒という側面を持っていた。〔中略〕ナチスほど数を数え、分類・選別するということに熱心だった政権はない」¹¹⁾と述べられている通り、重要なことは、正しい統計を取る為の分類である。医師達は人間の命をも分類し、数量化して業績としたのである。

さらに医師の専門領域のイデオロギーも安楽死実施にあたっては重要であった。ナチスの安楽死システムは、完全に分業化されていた。まず各精神病院の医師は、患者の選別の基礎資料を作成し、実施機関の鑑定人(医師)に送付する。鑑定人は、直接、患者を診ることも無く、診断書の項目のみを見て選別し、移送担当者にリストを渡す。移送担当によって、患者は殺害専用の病院へ連行され、殺害されるといった流れ作業^vであった。このシステムによって、多くの医師が「絶滅計画に役割を果たしたが、最終的結末まで関与する必要がなかった」⁴⁾のであり、故に医師達は分担された業務に客観的に取り組み続けられたのである。

ポイカート¹⁰⁾は、これらの医師の精神構造について、次のように分析している。「資本主義と官僚的な形式主義的な機能メカニズムによって市場と権力とを動かすようになったし、人々の社会的地位はますます門地家柄によってではなく業績によって決まるようになった。職業義務と社会的規律とがこれほどまでに人々の日常を律するようになったことはかつてなかった」。医師は、専門家としての功名心、立身出世を望む志向性があり、精神科医もその例外ではなかった。業績を重視するということは、科学の進歩を優先し、人間の客体化を推進させるものでもあった。また、被験者の人体の部品化・客体化は、心身はそれぞれ異なる本質を持つという近代デカルト的心身二元論^{vi}の思想の反映である。このことは、物理的客体としての身体という認識が、第三帝国の医学界のイデオロギーとして彼らの言動の基底にあったことを示すと思われる。「ナチスの医学は、20世紀的な科学という色合いを持ちつつも

理念的には19世紀の近代医学の延長にすぎず、むしろ一つの最終的結末であった」⁹⁾とあるように、医師達は人間の身体を、単なる物理的な部品と認知しており、被験者を物体と捉えていた。近代医学は“holistic medicine”を否定し、分析的“analytic”であり、変数を統制することが科学的条件であると考える。医師達は、人種や人体を変数と見立て統制しながら、科学的データの収集に努めたのである。

ナチスの時代、人間を資源として、客観的物質としてみなすという医師達の職業的価値観が、近代合理主義思想と相互に影響を与えながら、限りなく再生産されていったのではないだろうか。安楽死や強制収容所の殺人工程の中で、人間は容赦なく数値化され、統計処理を施されて、実績として報告された。

4. 結論

ここまで、CDAと社会的状況・制度的な背景、そして第三帝国や医学史の研究者の考察を踏まえ、医療犯罪にかかわりのあった医師たちのイデオロギーについて考察してきた。近代合理主義では、優生思想的な社会改革——体系的殺害——が近代合理主義の特徴的である数量化・統計処理と業績、専門領域による分業化と功名心・立身出世、科学主義といった医師の職業的価値観によって、後押しされたこと、そして人間さえもが、物理的客体として、数量化・統計化され殺人工程に組み込まれていたことを考察した。第三帝国の体制は、様々な思惑の上に成り立っていた不安定な全体主義であり、特に医師個人は全体主義者の一面を持ち合わせながらも、職業的価値観を強く保持していたことを、彼らの談話から考察した。近代合理主義の特徴である専門領域化や患者の物理的客体化に伴う数量化と統計処理重視のイデオロギーと医師の職業的価値観である立身出世、科学主義などが結びついたということが、原因の一つであるといえるのではないか。医学の進歩は、第三者には見当もつかない領域を作り出し、医師たちは自分達の専門領域に固執した。それは、医学の分業を生み出し、他者を排除すると同時に、自分の専門領域以外については、発言

を避ける傾向を生み出したのである。さらに、医療行為の分業化は、診断を作業と化してしまい、近代科学思想である要素還元論と相まって、人間を部品の集まりとしか見ず、物理的客体として扱うことを促進させたと思われる。この人間の数量化による統計処理¹²⁾と分業化は、安楽死の殺害システムとアウシュヴィッツにおける大量虐殺へと受け継がれてゆき、分担による責任回避と各部署の能率化という機能を最大限に生かしつつ、合理的に職務が遂行されていたのである。

参考文献

- 1) Fairclough, N. (2001 [1989]). *Language and power* (2nd ed.). London: Longman.
- 2) ハッキング, イアン (1999) 『偶然を飼いならす: 統計学と第二次科学革命』 (石原英樹、重田園江訳) 木鐸社
- 3) ヒルバーク, ラウル (1997) 『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』 (望月幸男、原田一美、井上茂子訳) 柏書房
- 4) ヒル, ベンノ・ミュラー (1993) 『ホロコーストの科学』 (南光進一郎訳) 岩波書店
- 5) カウル, カール (1993 [1968]) 『アウシュヴィッツの医師たち』 (日野秀逸訳) 三省堂
- 6) 木畑和子 (1989). 「第二次大戦下のドイツにおける安楽死問題」『1939: ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』 (245-283 頁). 同文館.
- 7) Klee, E. (1985). *Euthanasie im NS-Staat*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag. (邦訳: 『第三帝国と安楽死』 (松下正明訳) (1999) 批評社)
- 8) Mitscherlich, A. & Mielke, F. (2001 [1949]). *Medizin ohne Menschlichkeit*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag. (邦訳: 『人間性なき医学』 (金森誠也、安藤勉訳) (2001) ビイグ・ネット・プレス)
- 9) 小俣和一郎 (2002) 『近代精神医学の成立』 人文書院
- 10) ボイカート, デフレート (1997) 『ナチス・ドイツ: ある近代の社会史』 (木村靖二、山本秀行訳) 三元社
- 11) ブロクター, ロバート (2003) 『健康帝国ナチス』 (宮崎尊訳) 草思社
- 12) Schwarberg, G. (1997 [1988]). *Der SS-Arzt und die Kinder vom Bullenhuser Damm*. Göttingen: Steidl. (邦訳: 『子供たちは泣いたか』 (石井正人訳) (1991) 大月書店)
- 13) 高橋健一郎 (2003) 「イデオロギー闘争としてのコミュニケーション」、『社会言語科学』第6巻、第1号 pp.40-51
- 14) Wodak, R. & Reisigl, M. (2001). *Discourse and discrimination*. London: Routledge.

ⁱ 第三帝国時の医療犯罪の第一は「安楽死問題」であり、「心身障害患者」として入院していた多くのドイツ人患者を、本人や家族の意志に反し殺害した犯罪行為であり、その犠牲者は数十万人とも言われている。第二に強制収容所における多くの政治犯や反社会的といわれた収容者に対する生命に危険のおよぶ人体実験行為である。

ⁱⁱ 橋内(2003 [1999], p. 5)は、見解の相違はあると断りつつ、談話には次の4つの捉え方があると述べている。A. 文よりも大きい単位、B. 言語使用、C. 発話、D. テキスト。また、英語学用語辞典によると「複数の文が集まったものをいう。[中略] 文文法を脱却して、より大きなまとまりを言語学の対象にしようとし、その対象が談話と呼ばれた」とある。

ⁱⁱⁱ 原著名: *Ärzte in Auschwitz*

^{iv} 医学博士・東京大学教授であり、*Euthanasie im NS-Staat* 日本語版の翻訳を担当した。

^v ここには、フォード・システムの影響も考えられる。第一次大戦後、世界恐慌までの期間、ドイツには、大量のアメリカ資本が流入していた。

^{vi} この思想は、現代思想家であるメルロ＝ポンティの「身体が自発的に機能する様子を詳細に、分析することによって、人体的実存の構造を描き出すとする試み」と対置する考えであると思われる。